

1 派遣期日 令和5年8月11日（金）

2 派遣先 会場名 立正大学附属立正中学校・高等学校 馬込キャンパス
所在地 東京都大田区西馬込1-5-1
<https://www.rissho-hs.ac.jp>

3 研修内容

英語授業研究学会第34回全国大会に参加した。私は会員ではないが、英語授業研究学会は毎月の例会や支部研究大会などを行いながら、熱心に英語授業について研究してきた団体である。「個別最適な学びや協働的な学びを実現させる英語の授業とは」という大会テーマは、まさに今、英語に限らず全ての教科の授業づくりを考える上で欠かせないポイントである。その理解を深め、今後の授業実践に活かしていきたいと考え、派遣先として選定した。全2日間の日程であったが、オープニングレクチャーと分科会の内容に特に関心があり、1日目に参加した。

(1) オープニングレクチャー

「外国語学習の科学～SLA研究の知見を英語授業にいかに活かすか～」

講師： 白井 恭弘 先生（ケース・ウェスタン・リザーブ大学）

- ① どんな学習者が第二言語習得に成功するか
 - ・若い（長期的には） ・学習動機が強い ・適性が高い
 - ・母語が学習する言語に似ている ・学習法が効果的である
- ② 言語ができるとはどういうことか
 - ・文法能力 →音声、単語、文法の能力
 - ・談話能力 →一文以上をつなげる能力
 - ・社会言語学的能力→社会的に「適切な」言語を使う能力
 - ・戦略的能力 →問題が起こった時に処理する能力
- ③ どうしたら言語能力が身に付くか：言語習得の本質とは
 - ・インプット仮説 →インプットを理解することにより言語習得は起こる
 - ・自動化理論 →明示的知識を徐々に自動化していくことで言語習得は起こる
- ④ 効果的な外国語学習法・教授法
 - ・インプットとアウトプットを組み合わせる（アウトプットなしのインプットはあまり効果的ではない）
 - ・インプットの後にアウトプットする活動があることを前もって知らせておくことで、インプット処理のレベルが高まる
 - ・インプットを増やす（アウトプットの量そのものは、それほど必要ではない）
 - ・同じ（もしくは関連する）教材を使って、インプット→アウトプット→インプット

(2) 映像による中学校授業研究協議

「中学校2年英語：学習指導要領の本丸を目指して～真のやり取りとは何かを考える～」

授業者： 吉澤 孝幸 先生（秋田県立秋田南高等学校中等部）

- ①「卓球型」のイメージからの脱却
 - ・単なる会話の継続回数ではなく、「統合」の要素が入った「やり取り」が、「言語活動の高度化」への切り口になる
- ②「真のやり取り」とは
 - ・新しい情報があり、周囲のうなずきが生まれるもの
 - ・やらされている感のないもの～伝えたいという気持ちが満たされるもの
 - ・予想外の展開の中でのやり取り～目の前の生徒がすでに知っている語法での言い換えが必要→教師自身が力量を高める重要性

③ 言語活動におけるフィードバックについての論理的支柱と私見

○内容による分類

- ・Planned Feedback →新出文型に焦点を当てた場合に適切
- ・Incidental Feedback→広い言語形式を総合的に用いるような言語活動で効果的

○タイミングによる分類

- ・介入型フィードバック～言語活動をいったん止めて、言語形式について指導する
- ・遅延フィードバック ～言語活動が終わってからのフィードバック

○まとめ

- ・指導過程を固定化することなく、様々な訂正フィードバックを効果的に使い分けて、学習者である生徒とインタラクションしながら目指す方向に導く力が求められる

④ 足場かけとしての「メモ式スピーチ」と「定型表現」、そして「用法基盤モデル」

- ・メモ式スピーチ ～話者の論理構成で話すことを重視する
- ・定型表現と用法基盤モデル～キーワードから話し、納得してもらうためのサポート（例示、理由、価値づけ、言い換え）を加えていく論理構成を、定型表現として繰り返し用いる
 - 認知的負荷が軽減され、クリエイティブな部分に注意資源を注げる
 - 何回も使用するに従い、英語の流れが残像として頭に残る
 - “fluent unit of speech”を増やすことにつながる

(3) 課題別分科会

「個別最適な学びを実現させる指導・支援の在り方」

提案者： 藤木 真里佳 先生（山梨県山梨市立加納岩小学校）

大脇 裕也 先生（大阪府大東市立北条中学校）

兼コーディネーター： 桐井 誠 先生（文教大学）

4 感想

一つ目のレクチャーでは、第二言語習得（SLA：Second Language Acquisition）についての理解を深めることができた。どんな学習者が第二言語習得に成功するかについての話の中で、そのポイントとなる『若さや適性、母語が学習する言語に似ていることは変えることが難しいが、学習動機の強さと効果的な学習法については教師の工夫次第である』と聞き、教材研究や日々の指導の工夫が大切であることを改めて感じた。また、第二言語の習得理論として、インプットによって言語習得は起こるという「インプット仮説」と、明示的知識を徐々に自動化していくことによって言語習得は起こるという「自動化理論」の2つがあることを初めて知ることができた。それぞれにはメリットとデメリットの両面があるため、どちらかに偏らず、両者を最大限に利用することが重要であると分かった。インプットの量を増やすこと、インプットとアウトプットを組み合わせた活動を通して自動化を促進することなどを、今後の指導で積極的に実践していきたい。

二つ目の研究協議では、「やり取り」について深く学ぶことができた。授業の様子を撮影した動画の視聴を通しての協議だったことで、より実際の指導場面をイメージしながら参加することができた。テーマについての理解を互いに深められるような理想的なやり取りを実現するための提案として、『言いたいことを簡潔に言う→納得してもらうためのサポートコメントを1つから3つ程度入れる』という定型表現を繰り返し用いることで、生徒自身の認知的負荷が軽減され、定型表現以外のクリエイティブな部分に注意資源を注ぐことができるだろう、ということが挙げられていた。まずはサポートコメント1つのレベルから、少しずつ、継続的に実践していきたい。

最後に参加した分科会では、個別最適な学びを深めるための具体的な実践や、理論についての話をたくさん聞くことができた。特に、Can-Do リストをもとに、生徒一人ひとりが何をどれくらいできれば良いかを具体的に示した「単元毎の Mission Sheet」が参考になった。『生徒自身が、学習が最適となるように自分で調整する力』を身に付けていくという視点を意識して、今後の指導に当たっていきたい。